



第 52 回岩手大学 COE フォーラム

岩手大学 21 世紀 COE プログラム「熱-生命システム相関学拠点創成」では、関連分野において国内外で活発に研究をされている方をお招きしてフォーラム（セミナー）を開催しています。今回は、京都府農業資源研究センターの小坂能尚先生に、農作物のウイルス病を防ぐ目的で開発された“植物ウイルスワクチン”についてお話をさせていただきます。加えて、植物ウイルスワクチンの開発・実用化に至るまでの民間企業、公的研究機関、大学が連携した共同研究についてもふれていただく予定です。お忙しいとは思いますが、多くの方々にご参加いただきますようお願い申し上げます。

第 52 回担当・岩手大学 21 世紀 COE プログラム
高橋 翼 (tsubasa@iwate-u.ac.jp)

日時：2007 年 9 月 14 日（金）16:30～18:00
場所：岩手大学農学部 2 番教室

小坂 能尚 氏

（京都府農業資源研究センター・応用研究部長）

農作物のウイルス病を防ぐワクチンの開発と実用化

各種の農作物においてウイルス病が発生し、大きな経済的被害をもたらしている。生産現場では、媒介生物の防除や抵抗性品種の利用などの回避策が講じられているものの、十分な効果を発揮しているとは言い難い状況にある。そこで、最も有効な防除手段として期待されているのが、‘ワクチン’の利用である。

植物があるウイルスにいったん感染すると、同じか近縁のウイルスには感染しにくくなる‘干渉効果’と呼ばれる現象が起こる。これをウイルス病の防除に応用したのが、病原性が弱く植物体への悪影響がほとんど無い弱毒ウイルス、すなわちワクチンである。つまり、ワクチンをあらかじめ作物に接種して感染させておけば、ウイルス病の被害を回避できるのである。

演者は、20 年以上にわたり、まったく新しい作出手法である‘低温処理’を用いて各種のワクチンの開発と実用化にかかわってきた。最近では、ワクチン製剤や接種苗の全国展開を目指し、民間企業や大学、更には他県とも連携した産学公共同研究に取り組んでいる。

本セミナーでは、いくつかの具体的事例を紹介するとともに、今後の産学公連携のあり方やワクチン研究の方向性についても展望してみたい。